

高井有一

遠い日の海

講談社

遠い日の海

昭和四十七年四月十六日 第一刷発行

著 者 高井有一

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二 郵便番号 一一二
電話東京 (〇三) 九四五―一一二一 (大代表) 振替東京 三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定 価 五九〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

© 高井有一 一九七二



目次

序章	朝の藤	5
一章	新しい日々	15
二章	冷たい部屋	53
三章	兄妹	105
四章	真夏の島にて	131
五章	青い柿	183
六章	去つて行く者たち	201
終章	深い山	227
後記		242

装帧
||
原
弘

遠い日の海

序章 朝の藤

切れぎれの夢が連なる眠りからの醒め際に、下嶽安芸子しもだげあきこは艦載機の機銃の唸りを聞いたと思つた。奥深く晴れた空の真南に、巨大な太陽の白熱した輝きがあり、銃弾はそのまぶしい光の只中をつんざいて、驟雨しゅううのやうに落ちた。乾ききつた夏の野の道を、もつれ合つて逃げ惑ふ二つの影がある。そこまでの距離は遠く、叫んでも届きはしない。やがて影は薙ぎ倒され、土に這つて動かなくなる。爆音が空の深みに消えたあと、野には静寂が籠めた。母の骸なまがらを背負つて、安芸子は遮るもののない道を歩いてゐた。陽の光は容赦がなく、血の色をした汗が滴る。振返つて見る道に、血の痕は直線に続いてゐる。陽炎かげろうのゆらめく向うに黒く蹲うづくまるのは、重さに耐へかねて棄すてて来た父の骸であらう。

鶏が鳴いてゐた。決して時をつくらうとはしない雄鶏である。濡縁の下に置いた籠の中で、噎れた声をたて、時にせはしげに羽撃いてゐる。死なずに冬を越したのが不思議な気がする。雛を売る女は、駅前の闇市やみいちから少し離れた十字路の角に風呂敷を拡げ、雛のうごめく箱を並べ

てゐたが、安芸子が足をとめて覗き込んでも、買ふやうに勧めはしなかつた。その雛をどうして買ふ氣になつたか、今では判らない。ただ黄色の柔かな羽毛に触れてみたかつたのかも知れない。

「丈夫な雛だから放つておいても育つよ。直き、卵を産むよ」

と雛を売る女は言つたが、三羽のうち一羽は、翌る朝死んでゐた。次の朝はさらに一羽が死んだ。安芸子は硬張つた死骸を、裏庭の無花果の根方に葬り、明日は残りの一羽も死ぬだらう、身の周りの者が死ぬのは、自分にとつてごく自然なのだと考へた。だから、最後の一羽が死なず、雄鶏らしい猛だけしさを少しづつ露はにして来た時、却つてたじろぐ思ひをしたのを忘れない。

安芸子は搔卷の襟に顎を埋め、そつと息を吐いてみる。息はもう白くはない。冬は過ぎてゐた。顚顚のあたりを走る鈍い疼きとともに、機銃の音がまだ鳴りやまない。強ひて閉じる瞼の裏側に、忽ち白い光が溢れる。反転して去る翼が陽に映える光だらうか。父母が殺されて一年半あまりが経つのに、むしろ増して来る夢の鮮やかさを、彼女は怖れてゐた。

あの七月の晴れた金曜日、朝早く両親は出掛けて行つた。淡く雲を刷いた空に、透明な朝の光が漲り、楓の葉の緑を冴えざえと浮き立たせてゐた。門口で見送る安芸子に父は手を振つた。それは種子から油を採るために植ゑた向日葵が垣根に沿つて咲き並ぶ家の前の小路であつたのに、安芸子は、木蔭のない野の中の道を、父が手を振りながら遠ざかつて行つたのであつ

たやうに思へてならない。金曜日は父の徵用されてゐた工場の休電日で、両親は顔見知りの農家へ買出しに出掛けたのである。

遺骸は、竈の灰の匂ひがする土間に戸板にのせて横たへられてあつた。農家の主人は父たちが射たれた機銃の音を聞いたといふ。厚い鉄板を乱打するのに似た音が、僅かづつの間を置いて三度繰返された、だがそのあとは直ぐ元の静けさに戻つたから、村には敵機の来た事すら氣づかない人が多かつた、と彼は言つた。

「あんな荷物さへなければ、身軽に逃げられたらうのに」

傷ましさに彼が見返る先に、父のリュックサックがあつた。昔、山歩きを好んでしてゐた時分から、変らずに用ゐて来た藍色のリュックサックである。父はその重みに圧し潰されたやうに陽のあたる道に倒れ、やや離れた畑の土に顔を半ば埋めて母の屍があつたさうであつた。襲はれた時刻は、一時を少し廻つた頃であらう。その頃、私は何をしてゐただらうか、と安芸子は暑さと疲れとに萎えた頭で考へようとしたが、何一つ正確に泛びはしなかつた。変りのない一日があつただけのやうな氣がする。定刻に神田にある清明会病院の薬局に出勤し、日の暮れ際に歸つて来た。両親の身体に弾が撃込まれた時は、調剤台の前に坐つて、散薬を盛り分けてゐた筈であつた。高い天井から吊り降された四箇の裸電球に照らされる半地下室の薬局は、煤に汚れた白壁が寒ざむとして、倉庫で働いてゐるやうな錯覚を起させる。その中で薬包紙に盛つた薬の結晶のきらめくのが、安芸子には親しい。薬は次つぎと安芸子の持つ匙で盛り分けら

れ、運び去られる。調剤台に向つてゐる間は、何も考へず、指先だけがひたすら動き続ける。空襲警報を聞いた記憶もなかった。夜、干物を焼いて乏しい食事を整へ、両親を待つうちに安芸子はまどろんだ。知らぬ間に身体が傾き、息を呑んで眼を醒すと、卓袱台に置き並べた茶碗や皿が光つてゐた。幾たびも繰返して、安芸子は艶を帯びて冷たい陶器の肌を霞んだ眼に見たのであつたと思ふ。やがて夜が明けても両親は帰らなかつた。滲んで来る不安を押し殺して出てみる表の道にまだ陽はあたらず、向日葵はうなだれて花卉を閉ぢてゐた。

「でもなあ、顔を射たれないでよかつた。綺麗なままの顔で死ねてよかつた」

慰めようとして農家の主人が言ふのに、安芸子は答へなかつた。遺骸の眼は眠らされ、畑に伏してゐたといふ母の顔にも、土の汚れは跡形もない。むごたらしく殺されたのに、どうしてこんな綺麗な顔をしてゐるのだらう、いけない、そんなに安らかに死んでゐては。

日暮に近く、棺を積んだ荷馬車が村の焼場へ向つた。安芸子は細引で荷台に括り付けた二つの棺の間に坐つた。手綱を取る青年は、農家の主人と並び、低声に話しながらのびやかに歩いて行く。涼しさを含んだ風が吹き過ぎ、安芸子は、広びろとひらかれた野に身体が吸はれて行きさうに感じた。部落を出外れた所で、青年が足をとめた。

「そら、あそこに塚があるだろ」

小さな碑を囲んで三本の黄楊つげの木を植ゑた小高い塚であつた。

「あなたの母さんは、あの塚の蔭へ隠れようとしたんだな。そつちへ向いて駈出すみたいな恰

好で死んでたつけ」

塚の向うは平坦に畑が拡がり、遠く林らしい影の浮く地平線に、沈み際の陽に色づいた雲の峰が湧き立つてゐた。その雲を裂いて、頭上を襲ふ機影が、安芸子は見えるかと思つた。それは、この明るい静かな野を、ほんの一瞬だけ乱して、忽ち消えて行つたのだらう。消えたあとに遺された血まみれの二つの屍が、今かうして棺の中にある。初めての涙がこみ上げて、取止めもなく広い野の景色が崩れた。

「さあ、行かう」

農家の主人が促し、再び馬車は動き始めた。安芸子はもう雲を見ず、揺れ動く棺を抱くやうにして、轍わだちの下に小石が撥ねる音を聞いてゐた。

両親と別れてから、戦争の終るまで、幾許いくばくの日もなかつた。戦後、安芸子は家を逐はれた。疎開先から戻つた家主が、弱味を知つて要求する法外な家賃を、安芸子は払へなかつた。戦災を免れた学生時代の友人の家にしばらく同居したあと、この郊外の古い家に身を寄せて、丁度一年になる。その間、安芸子は少しづつ、一人だけの暮しに馴れて行つたやうであつた。

「ただいま」

と叫んで家へ駆け込む学校帰りの子供の姿を見て、胸の冷える気がしたのも、遠い日の事に思へる。

「ただいま」

と子供の甲高い声が、勝手口の戸を開け閉てする音とともに、安芸子の耳に長く消えなかつた。ただいまと声をかけて戸口に入る生活を喪つてしまつてから、どれだけの日が経つたらう、とその夜更けてから、牀に身をすくめて考へたものであつた。さうした思ひが今は淡くなつたのは、それだけ感情が枯れたせゐるだらうか。

廊下の向うで襖が明き、鈍く床を擦る蹠音と、痰のからまる咳が聞えた。この家の老人が起き出したのであらう。リウマチを病み、関節が絶えず痛んで、厚い蒲団を掛けられないといふ老人は、終日部屋に凝として、痛みの疼き寄せる部分を撫でさすつてゐる。安芸子は何度か、茶を飲んで話して行かないかと誘はれた。初めは六月の霖雨の頃であつた。籐の寝椅子に横になつた老人の頬のあたりに、軒から張出した藤棚の葉の繁りの緑が、淀んで映つてゐた。

「雨の日は辛い」

鬱陶しさうに、頸筋を揉みながら老人は言つた。

「身体 of 芯から、痛みが湧上つて来るみたいでなあ」

手入れの行届かぬ庭は草深く、一本だけ丈高く伸びた立葵が、白い花を咲かせて、音のしない雨に打たれてゐる。老人と安芸子のほか誰もが出払つて虚ろな家に、柱の鳩時計が硬い音で秒を刻んだ。老人は氣を遣ひながらも安芸子の過去についてあれこれと訊き、安芸子が答へるたびに、お氣の毒だなあ、お氣の毒だなあ、と繰返した。

「つまりは、時世がいけないのですよ。私だつて、時世がこんなにならなければ、もうちつと

樂に暮せてゐた筈なんだ。甲斐のない繰り言だけれども」

戦争に敗けさへしなければ、と老人は言つた。大正の終りに朝鮮へ渡つて苦勞はしたけれども老後に困らぬだけの金を貯め、帰国してからは深川に家作を建てその収入で暮してゐたのだが、三月十日の空襲ですべて失くなつてしまつた、と半ばは独り言のやうに言ふ老人の声は、くぐもつて聞きとり難かつた。

「朝鮮にをつた頃は、齡を取るのが楽しみだつたですよ。五十を過ぎたら安穩に暮せると思つてね。それがどうだらう、世の中が變つてしまつて」

お氣の毒に、と安芸子は呟いてみる。老人が安芸子の過去に殊更な同情を示したのも、自分の話を親身に聞いてもらひたかつたからに違ひないと思はれた。垣根の外を通つて行く女の話し声とする。長火鉢の猫板に置いた電熱器にかけた薬罐ぐわんの湯が沸いて吹きこぼれた。

「あなた、悪いが茶を淹れて下さらんか。茶筒は、そら、その棚に」

安芸子が立つて棚に手を伸ばさうとした時、俄かに重い音が轟いて家を震はせ、部屋は幕を引いたやうに翳つた。安芸子は声を挙げた。藤棚が崩れたのであつた。隙間なく繁つた葉が縁側の硝子戸にかぶさり、葉の間に溜つた雨水が迸るやうに音をたてて流れ落ちた。朽ちた柱が水を含んだ藤の重さを支へかねたのであらう。

「愕いたな」

不自由な身体を起して硝子戸を引き明ける老人の足もとをみるみる崩れた棚からの飛沫が濡

らした。

「古い棚だからね。そろそろ壊れたつて仕方がない」

藍色の寝間着に包まれた老人の身体が藤の翳の中へ溶けて行きさうに見える。葉に付いた水が滴り尽したあと、日暮のやうな部屋は、雪の降り積んだ夜のやうな静けさに満ちた。安芸子は茶を淹れ、一口啜つてみて、その親しい香りと温かさに安堵した。老人が両手に持つ茶碗から流れる湯気が白かった。

気づかぬ間に、鶏は啼きやんでゐた。安芸子は起きて雨戸を明け、濡縁の下を覗き込む。鶏は籠の隅に羽毛を膨らませて蹲つてゐた。陽の射さぬ裏庭の土は湿気を含んで、あちこちに小さな雑草の芽生えがある。冬のうちは、昼も融けぬ霜柱に、凍った土が持上げられてゐたが、その痕跡はもうなかつた。金盥を抱へて井戸端へ行きかけると、身体に深く疲れが染みてゐるのが判る。眠りが浅く、夢を見たせゐであらう。前夜、病棟の看護婦詰所でくだらぬお喋りをし、遅く帰つたせゐかも知れない。薬局と病棟は離れてゐたが、勤めが長くなるに従ひ、親しくする看護婦が増えてゐた。看護婦たちは、寮と病院の間を往復するだけの毎日に飽きてゐて、特に退屈な夜勤の時には、遊びに来る相手を飲んで迎へた。たわいもなく話し、笑つてゐれば、二時間くらゐは直ぐに消せる。誰もゐない部屋へ帰つて七輪に火を熾し、ささやかな食事を作る時間を忘れる事が出来る。

灯を消した大部屋の隅から廊下まで洩れてゐた女の哭く声が、まだ耳に残つてゐた。消灯直

後の看護婦の巡回について行つて聞いた声である。

「どうしたの、あの声」

その方へ眼もやらす通り過ぎようとする看護婦に安芸子は訊いた。

「カリエスで痛みがひどいのよ。消灯すると心細いらしくて、よくあんな風に哭いてるわ」

「どうにかならないの」

「駄目ね、高い薬は使へないんだから。死なない限り助かりはしないわ。尤も、死ぬまでにはまだ時間がかかりさうだけど」

看護婦は投げやりに言つた。欠伸まじりのやうにも聞えた。

「あたしたちだつて、さうさう優しくは出来ないわ。あの人だけが病人ぢやないんだもの」

夜はあと九時間経たねば明けない、と安芸子は思つた。泣き明して迎へる朝は、どんな色をしてゐるだらう。

夜更けの中央線の電車は空いてゐて、車体の周りに笛の音に似た唸りをあげて舞ふ風が窓硝子の破れ目から容赦なく吹き入つた。その風に頬をさらしたまま眠つてゐる男があつた。中野を出るあたりから、沿線に、焼け残つた住宅地の灯が明るく眼につき始める。安芸子は、電車がたまたま徐行して過ぎた踏切の際にある家の窓に映つた女の子の服の赤い色を、沁みるやうな鮮やかさで印象に留めた。赤い服の向うの家庭の和やかさが感じとれるやうであつた。西荻窪の駅を降りる人影は多くはない。昼間は闇市が立つ駅前の建物疎開跡の広場に、浮浪者が二

人、莫塵にくるまり、抱き合つて眠つてゐた。もうこの陽気なら凍え死にはしないだらうと考へて通り過ぎる。水道道路を越え、家まで女の足で十五分はかかる道である。安芸子は俯向いて足早に歩いた。暗くなつてこの道にさしかかると、何時も自分の蹻音に追はれる気になるのであつた。家へ戻るなり、窓を明け放して、安芸子は周囲が寝鎮まつた庭の夜氣を思ふさまに吸つた。

棚が崩れ落ちたままの形で放置された藤の、地面にうねつた枝の間から、新しい葉が吹き出ようとしてゐる。浅い黄緑色の、柔かな薄い芽である。陽は隣家の高い杉の木の向うに昇り、その上に斑らな影を落した。安芸子は井戸のポンプをわざと激しく動かし、流し場の三和土に撥ねて脛に当る水の、朝の冷たさを飲んだ。

老人のゐる座敷の縁の硝子戸も、杉の影がゆらめく朝の陽を浴びてゐる。疾うに老人は眼醒めてゐるであらう。藤の葉の芽生えにも氣がついてゐる筈であつた。若い葉の緑は老人を慰めるだらうか。両親の殺された村で、安芸子は巨大な藤を見た記憶があつた。あれは、母とともに初めて村を訪れた時ではなかつたらうか。藤は村の寺の境内にある松の老木にからんで、幹を伝つて這上り、蔓を四方に伸ばして松を枯らし、高く見上げる梢、横さまに張出た枝の先まで、重苦しいほどに豊かな紫の花を咲かせてゐた。今もあの藤は生きて、新しく芽を吹いてゐるだらうか、と安芸子は眼の前の庭にのたうつ藤の枝を眺め、そこに貧しげな花の咲くさまを想つた。